

西田哲学会会報

第五号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(076)2836600

西田哲学会第五回年次大会報告



今回の年次大会は、二〇〇七年七月二十一日と二十二日の二日間、埼玉県草加市の獨協大学で開催されました。東京から三十分以上も電車で揺られて、この地にわざわざお越し下さった参加者の方々にまずお礼を申し上げます。

勝明氏と小林信之氏とによって担当されました。とくに『善の研究』の講読部門に多くの方が集まりました。同日午後の講演会では、大石昌史氏と酒井潔氏とが、それぞれに興味深い講演をなされ、その後活発な質疑応答がなされました。

七月二十二日は、午前中に清水高志氏、石井砂母亜氏、岡野利津子氏が研究発表をされました。日頃の研究成果が披露され、密度の濃いものでありました。引き続き午後には、シンポジウム「西田における哲学と宗教」とが催されました。延原時行氏、山田邦男氏、築山修道氏のキリスト教、禅、真宗の立場からの考究が示され、J・ハイジック氏の絶妙とも言える司会によって、会場全体が生き生きと動いた感がありました。

大会を盛り上げて下さった全ての方々にお礼を述べさせて頂いて、以上を大会報告とします。

（文責・松丸壽雄）

シンポジウム論点

西田における哲学と宗教

J・W・ハイジック

二〇〇七年の西田哲学会で開催されたシンポジウムでは、「西田における哲学と宗教」というテーマについて三人のパネリストがキリスト教、禅仏教、浄土真宗のそれぞれの立場から考察した。

延原時行(敬和学園大学教授)は、西田哲学の企図を上田閑照の西田解釈「純粹経験・自覚・場所」に則って検証した。そこ



「(g)絶対の無(h)絶対(i)絶対の有」。かくして氏は、(d)即(g)絶対矛盾的自己同一の世界という所に、宗教心と神との等根源的「逆対応」が洞察されるのであるがゆえに、ここに西田のPantheismusがみえると論じた。

つづいて、山田邦男(羽衣国際大学教授)は西田の言う「禪的なるもの」について、最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」を主な手がかりとしながら、三つに分けて述べた。(1)宗教的立場(平常底)・西田は「宗教的立場」を「平常底の立場」の「徹底」であると規定している。「平常底」は禅語であり、その限り西田が基本的に禪的立場に立っていることは明らかである。この規定と並列させる形で、西田は「宗教的立場」を「立場なき立場」とも規定している。これはすべての宗教の立場がそこに還滅すると共に、「立場」としてすべての宗教の立場がそこから成立する、その否定と肯定との運動そのものであるとした。(2)宗教的関係を示す「逆対応」とは、我々が自己の罪悪性や有限性を徹底的に自覚すればするほど「絶対的一者」に接するという関係であって、このことは特に浄土真宗における仏と衆生との関係(悪人正機の教義)にみられると氏は解釈した。(3)

西田の宗教観の基礎には「禪的なもの」がある一方で、真宗的な側面も認められる。この仏教における両極とされる二つの立場が、西田自身の「心霊上の事実」を共に構成していたと推察される。西田はしかし、「禪宗」とい、浄土真宗とい、大乘仏教として、固、同じ立場に立っているものである」と言う。例えば「我々の自己は、動物的でもなければ、天使的でもない。この故に我々は迷える自己である。一転してその矛盾的自己同一において安住の地を見出すのである」という。この「安住の地」においても「動物的」と「天使的」との矛盾（自己矛盾）がなくならない。しかもその矛盾が矛盾のままで自己同一の所に於いてあり、そこに我々は「安住の地」を見出すのである。それが真宗で横超（自然法爾）、禪で脱落（平常底）と言われる所である。「立場なき」立場として、禪宗と真宗とはここに帰一す。そして、この帰一する所が西田の言う「禪的なもの」であると氏は論じた。

第三の発表者、築山修道（大谷大学教授）は、西田における「宗教と哲学の基本的関係」、「宗教の規定」、「宗教心」、「宗教問題の在処」など、西田が宗教を問い論ずるにあたって、もっとも基本的にして肝要な点・視座

と考へていたものが何であるかを、本論考の方向づけのために確認した。次に、「西田の真宗・親鸞理解の特色とその意義」を、『宗教論』において何度も繰り返し使用されている「横超」「自然法爾」「義なきを義とす」「親鸞一人がためなりけり」などの真宗用語を、西田が如何ような文脈と意味において使用しているかを手がかりに、解き明かした。その結果、西田が真宗・親鸞の宗教の核心的本質を何処までも「絶対悲願の真の他力宗」として場所的論理的に把握し、そこに「絶対矛盾的自己同一」としての「即非の論理」・「背理の理」を徹見していること、そしてそれが彼の「名号観」に象徴的に（逆対応的表現として）表明されていることを示した。西田のかかる真宗理解は、さらに、真宗における「宗教と現実の歴史的世界」の積極的・創造的関わりの可能性を論理的に呈示し、現実肯定の積極的評価をもたらし（例えば、絶対的受動からは絶対的能動が出て来なければならぬなど）。つまり、真宗は西田の宗教哲学的知見によって、新たな可能性を開示されたと同時に、新たな課題をも要求されたのである。そしてその事は、逆に、宗教的事実が哲学にさらなる反省と説明の可能性をもたらさうることを含意

する。かくしてそこには、宗教と哲学の相互限定が見られると氏は結論した。

パネリストの間および会場とのやり取りで三時間半の濃密な学術的時間を満喫したが、その出発点は宗教を心霊上の事実とする西田の発言であった。西田の哲学論そのものは「事実ではないのではないか」、それに関連して「西田自身は一体どのよう宗教と哲学との境界線を引きいたか」、等々の質問があった。延原氏の発題は自身の宗教観とどう噛合っているのかという疑問に対して、氏はホワイトヘッドの「形而上学は飛行機による飛翔の如し、イマジネーションで飛び立ち、また事実の世界に着陸して、検証に身を委ねる」という方法に学ぶと示唆した。そして心霊上の事実を死の自覚まで掘り下げた所で、突如、神の構造の問題として「絶対者は、無に對することによって絶対有となる」と観じた時、哲学への転入が起こったのではないかとこのことについて、氏は滝沢の「インマヌエルの原事実」論も抽象論ではないか、という疑問に答えて、一九六〇年の火事の経験から（ヨブ記と共に）「神よ、なぜ私に」の叫びの内に祈りの実存構造を知るに至り、その延長線上で滝沢に出会って納得したとのべた。

山田氏にとって、西田は、一方では猛烈な禪修行をし見性もしているが、他方では親鸞の言う「悪人正機」を深く肯定している。この禪的なものと真宗的なものが共に西田の「心霊上の事実」となっていて、この両者をいかにして自己の内て落着させるかが宗教的事実としての西田の課題であったと答えた。しかも、西田はしばしば「物となって考え、物となって行う」と述べたが、西谷啓治も哲学者としての西田について「哲学することになりきる」と評している。このように、西田にとって「哲学すること」がそのまま禪の実践であったと言いうるであらうと主張した。

築山氏は、とりわけ山田氏の提題によれば、西田は「宗教的立場」を「立場なき立場」と規定し、そのような宗教の立場を「平常底の徹底」というが、そ

れ自体がまさしく哲学的立場からの哲学的言表であると言っているが、他方、宗教つまり禅自身は自らの立場を如何ように表現するのであるか、と問う。かかる問いに対して氏は、哲学と宗教の相違点ないし共通点を端的に現示することになると応答した。このような問いについて、西田ならどのように応答するであろうかについて、氏はこう論じた。端的に哲学の立場からは、場所的論理（絶対矛盾的自己同一）的に何処までも言葉によって事実の事実性をそれが何であるかを説明すべく尽くさなければならぬ。他方、禪の立場からは、一定の表現形式などはなく、多様な可能性があるが、しかし、いずれもそれは全存在的・人格的な霊性的・自覚的応答でなければならぬ。例えば、黄檗の「一打」、臨済の「一喝」の如きである。

特別寄稿

断続の信より常住、絶対の信へ
—西田哲学を契機として—

海邊 忠治

実は最近になって私自身に大きな転機が生じた。七、八年前から私なりの一つの宗教的、哲学的廻心が生じたので、果して

これが本物であるかどうか、爾来、自分を観察し、私自身の不安、心配、迷い、対立、人間関係等のすべての苦悩が、今回の廻心によって果して現実を超えられたか、引続き反省検討してきたが、ある意味において確信を得たので、この度それを記述することにしました。今までと同様、現在も喜怒哀楽、感情の起伏は

激しく往来している。しかし今までのようにそれらが私の根本苦悩となることは無くなってきた。

私はいつも思ってきたのであるが、何か心に感じるものがある、法悦にひたり、あるいは精神の高揚を感じた時には、絶対者と一体であり、自分は最高の信を得、不動の信を得たと思うのである。しかしまた時を経て何らかの逆境において、悲哀を感じた時には、絶対者から離れた不安を感じる自分を情けなく感じてきた。ああ、自分はまだ永続的な信を得ていないのだ、断続的に信じられないのだ、とつくづく思ってきたのである。その繰り返しが今までの私の人生であった。何とか永続的な信を得たい。常住、絶対の信、大安心を得たいと心にさせてきた。しかし遅まきながら、やっと今になって、私なりに会得されてきたものがあり、対立断続にありながら常住の一を、凡夫相對の身にありながらその底に不離なるものを感じられるようになってきた。

現実的にはそうなっていたと思われる。よく言われるように、自分に真実の信仰が得られないのは、信仰が足りないからだとして、絶対者に向かつて一生懸命に信を得ようと努力する。そういうあり方ではおそらく何年かかっても常住の信は得られないのではないかと思われる。ここでは絶対者は、私の対象として私の向うにあり、私を中心として対象化されたものとなってしまふ。故に絶対者と私とは対象の二の關係になつてくる。対象の二であるから、ひつついたり離れたりするのである。法悦を感じた時には絶対者と一体であり、悲哀を感じた時には絶対者と離れるというのでは、永続的な信、常住の信とは言えない。常住、絶対の信においては、私自身が常に絶対者に裏打ちされている。絶対と相對の私とが對象的、對立的の二の關係ではなくして、離れようにも離れられない、不二の關係になつてくると思う。

本来、相對は絶対との關係によつて成立している。絶対と相對とは絶対に逆なるものがあり、相互否定的關係があるが、同時に本来不二にして一如なるものである。絶対者を仏と呼ぶならば、仏と私の關係は、絶対と相對、無限と有限、全体と個、一と多、空と有の關係であり、両者は離れようとしても離れられない必然關係にある。結論的に言えば相對、有限の私は、絶対、無限の仏なくしてはあり得ない。絶対者の自己否定、すなわち仏の大悲によつてのみ相對の私は成立すると言わざるを得ないのである。更に具体的に言えば、相對の私があり、私が働いていることが、裏から言えば実は絶対者の自己否定、仏の大悲が働いていることに外ならない。逆に絶対者の自己否定、仏の大悲が働いていることが、とりもなおさず、相對の私があり、私が働いていることに外ならないのである。

普通には、神の摂理と私、仏意、大悲と私とが對立的に二としてあり、摂理、仏意、大悲に私が従う。私の生が摂理や仏意に操られているかのように、解釈されている。また私を仏に任せるといふ場合にも、仏と私が對立、對象的に二として考えられ、私からかかる對象的の身に身を任せるといふように考えられている。しかしそのように両者は對立的二であるのではなく、実は神の摂理、仏の大悲の働いていることが、裏を返せば、そのまま私がある、私が働いているということであり、それが実は絶対者の自己否定、大悲が働いているということ、それ自体に外ならなかったのである。

二つあるのではなく、絶対者の自己否定的働き、大悲の働きただ一つあるのみである。両者は逆對應的に一の關係、裏表の關係である。表の私があり、私が生き、かつ働いていることが、実は裏で絶えざる絶対者の自己否定、仏の大悲が働かれていますことである。そこにおいて大悲の働きが私の働きとなるのは、両者の働きが本来、逆對應的に

エッセイ

哲学サロン

語り合いと相互主観性

イーエン・メギール (Iain Megill)

人と一緒にものを習うというのは、大体二つの習い方のアプローチが考えられる。

伝受型・伝統を教わって、自分がそれを守って、次の人に伝えるという学習法である。まるで一つの容器から、もう一つの容器に、貴重な液体を注ぐ様に。こういう時、大事な条件は三つある。第一に、液体を受ける容器は逆さまであれば困る。そういう状態では何も入らないから。それは、生徒が寝ているとか、集注していないとか。先生が話しても、何も生徒の頭に入らない。第二の条件は、受け

一であったからである。絶対者、仏と私とは、このように對应的に離れられない必然關係であった。それに真に気付くことが本来の人間のあり方、常住の信であったのである。この論理構造の詳細については、拙著「苦悩とけて絶対の信へー西田哲学を契機としてー」(法藏館)をご一覽下さい。

る容器は一応逆さまではないけど、底に穴が空いてれば、また困る。先生は液体をいっば入れても、容器に残らず出て来る。生徒が折角教えてもらった事を忘れてしまう。そうであれば伝統が途絶える。第三の条件は、受ける容器はまた綺麗でなければならぬ。ゴミとか毒とかが入ってれば、受けた液体が変化して、次の人の為には、もう安全な飲み物ではなくなる。生徒は自分勝手な意見を以て、伝統に混ぜたり、伝統を歪曲したりするのはいけない。

つまり、生徒は一生懸命に先生の言う事を聞いて、正しく理解して、それを確りと覚えて、自分の意見を混ぜないで、次の世代に伝えると、世代から世代へ、伝統の流れが上手く行く。一般的に言うと、この教え方は丁度、数学と自然科学の教え方

に相応しい。今までの科学の伝統が有って、生徒が一先ずそれをそのまま受ける。後に、実験によって、データが増えても、その科学の根本的なパラダイムには、飛躍的な変わりが滅多にない。生徒は先生の教えている事に討論するなら、授業が始まらない。先生は二たす二は四、水はH₂Oであると教えたら、生徒はそれについて言うことは先ずない。そのまま承知するだけが生徒の役割で、習うというのには言われた事を、そのまま確りと覚えるだけ。

さて、もう一つの人の学習法はどうでしょう。
弁証型・先ず最初に、先生と生徒の立場は、前の伝受型の習い方と違って、上下関係ではなくて、イコールとなる。極端に言えば、先生と生徒という立場は最初から無い。それとも、二人ともは先生で、二人とも生徒である。併し、そういう状態の中で、授業がどうやって進むか。そのカギは二人ともは、知っている事と知らない事がどちらもいっぱい有る。但し、一人の分からない事は、もう一人は分かっているかも知れない。先ず、お互いの知識を補うことは出来る。でも、さらに素晴らしい事もある。二人の語り合い dialogue/dialektik によって、二人とも今まで知らなかった事

が発見できる。今までの伝統に存在しなかった事が、二人の語り合い／弁証法によって現われてくる。自分の意見を主張しながら、その意見を発展させる。相手が私の言う事を聞いてくれているお陰で、私が私を発見していく。激しい討論の中でも、相手の個によってこそ、私は個となって、個として成長する。相手に深く感謝する次第ではないか。

この弁証型学習法にも、大事な条件が有ります。前に述べた様に、二人のイコールな立場は基本的な条件だが、それだけでは語り合いは必ずしも始まらない。相手を聞く耳も無ければならない。私としての自我は、相手を他我として認めている限り、本当の語り合いは出来る。私は相手を主として見なくてはならない。併し、私もまた主である。主が二人、客はいない。我と汝の状態の中で私達の語り合いが進む。そういう相互主観性、相互に一生懸命に聞く耳、相互に正直に向く顔が、本当は愛の態度と言っても良いかも知れない。

而も、今まで述べたように、若しそういう相互的向き合いは私達の個としての存在・発展の根本原因で有って、私達の本当の語り合いと新しい発見の必要条件でも有るなら、今度こうい

う風に表現するのは許されるかも知れない。愛は存在と知恵の必要条件である…。

勿論、前の伝受型の習い方で、個は個によって個となる。生徒が一生懸命に従っても、思わず、間違える事が多い。正しく伝統を活かすためには、自分に克つ必要がある。生徒の個が、伝統という動かし難い個によって形成され、成長する。止揚を果たす弁証法は生徒と先生との間だけではなく、寧ろ生徒と伝統その者との直接的なぶつかり

「西田哲学雑感」

三宅 浩

かほく市にある西田哲学館を、「夏期哲学講座」や他の用事で訪ねるたびごとに、この建物の立地状況や構造に私は圧倒される。まさにここに建ててくださいとばかりに、その丘の眼下にはなだらかな山並みを背景としながら、かほく市のにぎにぎしくも穏やかな風景が広がっている。春まだ浅い時季には、はるかに立山連峰や白山が流麗な白い山肌をのぞかせている。梅雨に入れば、霞の移ろいが時間の流れを際立たせる。そうした立地状況のもとで、整然とした外観とは裏腹に、建物の内部はかなり複雑な構造をしてい

合いである。

併し、僕は文系に所属する西洋人で、やはり弁証型の習い方に慣れて、どちらかと言うとその方が好き。それ故、初めての西田哲学学会でも、読書会ではなく、敢えて哲学サロンに参加させて頂きました。丁度僕の抱いていた希望に応えて、哲学サロンにての私達の語り合いは大いに僕の哲学的成長を促してくれた。心から感謝しています。ありがとうございます。

まず、この建物のホールは地下にある。西田、および西田哲学に関する展示場に表示されている順路は、正しい方向を決して示さない。建物における位置案内の表示も、何か怪しい。一階の入口から地下の男子トイレに行こうとしても、降りる螺旋状の階段を進む方向を間違えると、同じ階段を先に行く振り返った若い女性から不審な顔をされてしまう、等々。私は圧倒されてしまう。建物の外観と内部構造の関係から、まさにこの建物そのものが、そうした意味で「絶対矛盾的自己同一」を地で行くものだと納得しているのは、私だけではないだろう。したがってどこまでも興味が尽きず、何度来館しても飽きるこ

がないのだとも言えよう。これも安藤忠雄先生のヒューモア・センスのおかげなのだろう。しかしこの魅力は西田哲学にも通じるものがあるのではないだろうか。このように考えているのも、きっと私一人ではないと思われる。

西田哲学はその獨創性ゆえに、いかなる事由によるとしてもひとたび哲学を学ぼうとする人に対して、独特の磁力を発している。もはや理屈ではなく、『善の研究』のテキストが放つ精妙にキラキラとしたものに魅了されてしまう。しかしひとたび足を踏み入れると、西田哲学特有の果てしなく大きな思索の渦に心を奪われてしまい、その底知れなさに触れることになる。ともすれば自分の居場所をとらえることさえおぼつかなくなってしまう自分に気づいて愕然とするかもしれない。さすればである。言うなれば、西田哲学の麗しい外観とは裏腹に、その内部構造の複雑さに辟易して、またもや「私は圧倒されてしまう」という事態に陥ってしまう人々も少なくないだろう。しかしこのことがまた、ある意味で自分イメージ的な志向に繋がると言えるのかもしれないが、たまたまない西田哲学の魅力を示している。

西田哲学館に関してわれわれの好奇心をそそるものは、西田

哲学の特徴を暗示していると言えよう。つまり両者はともにいわゆる微妙な調和の内にあり、ともに響き合っている。そうした両者の共振する軌道上には、実に精妙な調和が溢れている。西田先生は三木清との対談の冒頭で、三木に日本文化の根本的な特徴とはなにかと問われて、西田先生は「ギリシア人は彫塑的だが、日本人は音楽的などころがありはしないかと思う」とおっしゃっている。また同対談録の他の箇所でも、「音楽的」ということの文化的な重要性を示唆しておられる。まさに「音楽的」な響き合いが西田哲学と西田哲学館のあいだにあるように感じられる。

だが、われわれの日常も「音楽的なもの」と深く関わっていると見えよう。その次第をたどってみよう。われわれの日常は、それぞれの人のいわゆる「気分」の中で営まれている。「気分」は一種絶えず動く波であるところから「気分」は、それ自身が波長を持って動いているのだから「音楽的なもの」だととらえることができよう。あるいはそうした「音楽的なもの」について支えられているのがわれわれの「気分」であろう。その波において、われわれの日常生活は形成されていく。われわれが持つ喜怒哀楽の情は、そうした

波の内にとらえることができるだろう。だがこの日常的な波が突き崩されるときがある。われわれの日常を支える「音楽的なもの」は、作用しえなくなる。そのとき人の心は張り裂けてしまふ、という事態になるだろう。心を痛めている人が少なくない時代でもある。それゆえ「癒し」を求める気風もある。しかし五感の内にもそれを求めても、一時的な効果に過ぎないと言えよう。それではどうすればよいのだろうか。喜怒哀楽の情を越えたところに心を開けることによって、

総会報告

第五回年次大会の総会は、二日目の七月二十二(日)、午後一時四〇分よりメイン会場である小講堂で行われた。出席者は約六〇名、司会進行は、理事の秋富が担当した。

まず、大熊理事から二〇〇六年度会計報告および会計監査報告が行われ、出席者によって承認された。次年度への繰越額も増え健全な財政状態ではあるが、若干の会費滞納者については、この場をお借りして納入へのご協力をお願いしたい。

ついで、岡田編集委員長より『西田哲学会報』と『西田哲学会年報』各第四号の刊行、および今後の編

集計画について報告がなされた。特に会報は全会員の声を反映できる媒体であるので、幅広く原稿を募りたい旨、編集委員長からの呼びかけがあった。

最後に、来年度の大会が、平成二十年七月二十六日(土)、二十七日(日)の二日間、石川県西田幾多郎記念哲学館で開催されること、秋富より報告され、総会は終了した。なお、総会は、学会員が公的に意見交換できる唯一の場であるので、積極的な意見や提案を期待したい。

(文責 秋富)

理事会報告

西田哲学会第五回年次大会の開

西田哲学研究会の「案内

・西田哲学研究会「於東京」
西田哲学研究会は、日本大学大学院に籍をおく社会人学生達が卒業後も更に研究の場を持ち、研究を続けたいとの願いから、八年前に発足しました。主な活動は読書会の開催と機関誌「場所」の発行です。

読書会は小坂国継先生にご指導をお願いし、西田幾多郎の論文を逐次、輪読しています。当初の読書会は社会人学生が中心でしたが、現在はさまざまな分野からの哲学研究者の集まりとなりました。教育、医療、宗教、芸術、心理、福祉、経済、文学などの諸分野の方達です。哲学は全ての学問の根本といわれる様に、各会員は、社会の様々な分野における様々な問題意識から、哲学的思索へと誘われたのかもしれない。月一回の読書会は参加費無料で、どなたでも参加できますので、皆さまの来会をお待ちしております。

研究発表の場として機関紙「場所」を発行しています。「場所」の中には西田哲学と直接、関わらない論文もありますが、この哲学の内包している豊かな可能性ゆえと捉えています。「場所」各号の色は日本の色、和の色を用い、表紙に目次を載せています。主な大学の教室あるいは図書館に送付していますので、お読み頂ければ幸

- 1) 第六回年次大会について。
平成二十年七月二十六日(土)、二十七日(日)に石川県西田幾多郎記念哲学館(石川県かほく市)にて開催することが了承された。プログラムについては今後検討を進めていく。
- 2) 二〇〇六年度会計報告
会計報告ならびに会計監査報告が提示され、了承された。
- 3) 編集委員会報告
「会報」ならびに「年報」の構成原案・発行計画について報告がなされ、了承された。
- 4) 西田哲学研究基金について
西田哲学研究基金運営委員会より選考結果が報告され、白井雅人氏、ブレット・デービス氏の二名に研究助成金が支給されることになった。また応募者の推薦を理事各位に求めるとともに、応募要領については別途発表することが報告された。
- 5) 研究発表の応募について
海外在住の会員や外国語を母語とする会員にも発表の応募を広く促していくとの方針が確認された。
- 6) 次回理事会の開催について
二〇〇七年十一月初旬に東京にて開催することが了承された。

いす。また特別寄稿として、小野寺功、鈴木亨、竹村牧男、浅見洋、田中久文、小坂国継等、諸先生の論文を既刊号に掲載しています。各先生方には、西田哲学研究会の活動の趣旨をよくご理解いただいた上、玉稿をお寄せいただき感謝しています。

なお、当研究会に関心のある方は左記に御連絡ください。

〒一六七〇〇五一

東京都杉並区荻窪

四一二五一一一七〇一

西田哲学研究会事務局

nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

・西田哲学研究会「於京都」

西田哲学会創設の記事を新聞紙上に見つけた時は驚きました。一般にも参加を呼びかけてあったからです。そして西田哲学が東洋と西洋の思想を突き合わせながら独自の思索を展開したものであるということを知ると、雲の上に放置していた哲学の高い高いハードルが、急にすうーっと降りてきたらしく(!)、いつのまにか京大大会館での研究会に参加させていただくようになりました。

渾身口以って虚空に掛り、
東西南北の風を問はず、
一等地と般若を談ず。
ちんちんちんちんちんちん
滴丁東了滴丁東。
——如浄の風鈴頌より——

斬新な哲学の風に吹かれながら深く呼吸ができる場所を与えられ、とても嬉しく思っています。この研究会は故西谷啓治先生を中心に四十年以上も前に始まった由緒あるものであるそうです。年に四回あります。なんともありがたく、西田哲学の懐の深さを感じます。

私の専門は臨床心理学です。ユング心理学と東洋思想という大きな柱の間に立たされ長らく途方にくれています。そんな迷いに対する道しるべすら、西田哲学は当然のように示しているのに気づきました。時空を超え、難解というベールや表層的な専門分野の相違など容易に突き抜けて脳裏に飛び込んでくる西田哲学の光は、まるで埋蔵経のようです。

ただ私の場合は一メートル上から降りてきたハードルのことですが、考える次元が低すぎますと、みなさんの足手まといになりますから、百尺に近づける努力を自らに課することを忘れないことをここに宣言したいと思えます。

なおお問い合わせは、大谷大学教授築山修道先生のもとへ。

(森下温美)

立正大学哲学科

シンポジウム

「日本の哲学思想の可能性」

日本の哲学思想が、他の伝統の下に立つ哲学思想や現代日本・現代世界に対して有しうる意義と可能性について、国学、和辻倫理学、九鬼哲学、西田哲学などを手がかりとして議論する催しです。自由参加(無料)です。どなたさまもふるってご参加下さい。

日時 二〇〇七年十一月十日(土) 午後三時より午後五時三十分まで

場所 立正大学大崎キャンパス

パネラー 野崎守英氏、坂部恵氏、大橋良介氏。

司会 板橋勇仁氏。

問い合わせ先 哲学科事務室(文学部共同研究室内) TEL 〇三(五四八七) 三三八一

一月・水・金の各曜日午後が連絡可能な時間帯です。

「西田哲学研究基金」について

第一回の西田哲学研究基金交付として、昨二〇〇六年度は、三人の応募者のなかから、慎重審査の結果、下記の二名にそれぞれ三十万円を交付しました。

白井雅人氏(上智大学大学院博士後期課程在籍中)

研究計画…「特に「弁証法的な一般者としての世界」以降の後期西田哲学についての研究」

ブレット・デービス氏 (Assistant Professor, Loyola College in Maryland)

研究計画: "Continental and Japanese Philosophy: comparative Approaches to the Kyoto School"

今年二〇〇七年度の交付基金を公募します。一件につき三十万円から五十万円、数件の採択を予定しています。審査結果は、西田哲学会の『年報』に報告します。

応募要領は左記のとおりです。

- (i) 履歴書
- (ii) 研究計画
- (iii) 提出先・郵便番号六〇六一 八五〇一 京都市左京区吉田本町、京都大学文学研究科、気多雅子研究室
- (iv) 締め切り・二〇〇八年四月

は島田洋子氏にお願いしました。京都の研究会参加者の森下温美氏は臨床心理士として研究活動をしておられます。編集後記を改めて通読して、「又被風吹別調中(また風に別調の中に吹かした)」という読後感を持ちました。さらに先日訪れた仙厓(臨濟宗古月派、博多の聖福寺住職、一七五〇、一八三七)の回顧展で見た直指人心 見性成佛 更問如何 南無阿弥陀仏」と書かれた掛け軸(右隅には、「達磨忌や尻のねふとか、痛と御坐る」とある)も少ししらす思い浮かびました。寄稿していただいた「年報」の公募論文への多数の応募をお待ちしています。(編集委員長 岡田勝明)

は島田洋子氏にお願いしました。京都の研究会参加者の森下温美氏は臨床心理士として研究活動をしておられます。編集後記を改めて通読して、「又被風吹別調中(また風に別調の中に吹かした)」という読後感を持ちました。さらに先日訪れた仙厓(臨濟宗古月派、博多の聖福寺住職、一七五〇、一八三七)の回顧展で見た直指人心 見性成佛 更問如何 南無阿弥陀仏」と書かれた掛け軸(右隅には、「達磨忌や尻のねふとか、痛と御坐る」とある)も少ししらす思い浮かびました。寄稿していただいた「年報」の公募論文への多数の応募をお待ちしています。(編集委員長 岡田勝明)

十五日必着

備考・二年以内に、研究成果報告を出していただくことになっていきます。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の気多研究室とします。

西田哲学研究会基金委員会 二〇〇七年度代表 松丸壽雄

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんのお応募をお待ちしています。なお次号第五号掲載分は、二〇〇八年二月末をもって締め切りとさせていただきます。